

【心理学研究科心理学専攻（専門）出題意図】

【設問全体の出題意図】

本設問は、特定の心理学のテーマについて深く理解し、それを言語化・文章化する能力があるか測定することを目的としている。特に、博士論文を作成するために必要な高度なディスカッションスキル、論文作成スキルの素養を評価することに焦点が当てられている。

【各設問の出題意図】

- ①（出題意図）実験計画とは仮説検証を目的とした実験における独立変数と従属変数の取り扱い方針であることを理解している必要がある。また、被験者内計画と被験者間計画では平均値を比較する際の方法が異なっていることを理解している必要がある。とくに、被験者内計画では被験者の要因を誤差として除外できるために一般的に大きな効果を期待できるというメリットがあるが、他方で、すべての被験者がすべての条件に参加するため、順序効果や疲労の効果など様々な剰余変数に対処せねばならないというデメリットがある。
- ②（出題意図）応用行動分析学では、行動を指標とした実証的な事例研究が重視されているため、代表的な手法であるシングルケースデザインについて理解を問う設問である。具体的な研究計画の中で、特に対象者の人数、標的行動の定義、記録の方法、研究デザインを提案してもらい、研究計画能力を評価することを目的としている。
- ③（出題意図）横断研究と縦断研究の短所・長所を整理した上で、それらの短所を克服しうる系列研究の特徴や、成人期という長期間にわたる心理的性質の質的な変化をどうとらえるかという問題などについても論述できることが望ましい。
- ④（出題意図）2014年の障害者権利条約の批准から始まるインクルーシブ教育については、教育界において目下のテーマである。その流れの中で、障害者差別解消法の改正法が令和5年から施行され、合理的配慮の不提供の禁止は民間機関においても法的義務とされている。このような社会全体の動きの中で心理職としても、その意図と意義を十分に組んだ役割の実施が求められている。特にエビデンスを専門的に収集するなどはその役割の大きな部分を占める。このような文脈での解答を求めることが出題意図である。
- ⑤（出題意図）この問題では、人の真偽判断に関する知見をどの程度適切に理解しているかを評価している。人の真偽判断に関するメタ分析の知見に言及した上で、欺瞞の手がかりに関する信念、真実デフォルト理論などの観点から、人の真偽判断の特徴を論じることが期待される。これにより、嘘や欺瞞に関連する心理学的研究への理解の深さを測る意図がある。

- ⑥ (出題意図) 本問題は、顔の認知に関する神経心理学的研究の動向と主要な研究成果を統合し、顔の認知を支える神経基盤について自身の言葉で明確かつ一貫性のある論述を構成する能力を測定することを意図している。具体的には、顔の認知の特異性、また、顔の認知に至る各認知プロセスとそれらを支える神経基盤について、相貌失認研究に代表される神経心理学的研究の重要な研究成果(Pallis, 1955, De Renzi, Faglioni, Grossi, & Nichelli, 1991 など)を引用しながら体系的に整理し、論述することが求められる。さらに、相貌失認の顔特性に関する議論(Gauthier, Behrmann, & Tarr, 1999, Sergent, 1987 など)についての言及があった方が望ましい。
- ⑦ (出題意図) スクールカウンセリングを実践する上での基本的枠組みの理解を問う問題。スクールカウンセラーの活動において、フォーマルなものに加えインフォーマルなアセスメントの意義、柔軟な面接構造の意義、集団への対応や予防的活動の意義、家庭や関係者との連携協働の意義についての理解を問う問題。
- ⑧ (出題意図) 精神疾患の維持メカニズムを認知行動モデルによって理解し、それを具体的な治療プロセスへと展開するケースフォーミュレーションの能力を問うものである。選択した疾患において、どのような認知の歪みや回避行動が症状を悪循環(維持要因)させているかという理論的背景を明示した上で、それらの要因に各技法(曝露法、認知的再構成等)がどのように作用するかを詳述することを求める。治療プロセスを単なる手順の羅列としてではなく、クライアントとの「協同的実証主義」を通じた仮説検証作業として捉えられているかを重視する。特定の疾患特有の悪循環をどのように断ち切り、機能的な適応へと導くのか、その機序と期待される心理的変容について、理論と実践を統合して論じる論理的思考力を評価することが目的である。
- ⑨ (出題意図) 心理学という学問全体の活動の特徴をどのように捉えているのかを把握することが第一の出題意図であった。抽象的な問いかけであるため、絶対にこうである、というような回答は必ずしも無い。また、知識をそのまま正確に論述するような回答は必ずしも期待されていない。むしろ、こういった抽象的な問いかけに出会ったとき、自分の有している知識や経験をどのように活用し、自分なりの論理をどのように展開してゆくか、また、その論理にどの程度説得力があるか、ということが問われることになるであろう。例えば、心理学という学問の特徴が、純粋な基礎科学というより、どちらかと言えば、得られた知見を実生活に応用していこうとする、応用的な学問分野であるということについての理解や認識は必要であろう。教科書的に言えば、心理学の目的は、1.人間の心理と行動の記述、2.人間の心理と行動の説明、3.人間と心理と行動の予測、4.人間の心理と行動の統制(コントロール)であるとされる。そして、それらを段階的に達成しつつ、究極的には、人間の生活の質の改善に資することが目指されている。一方で、心理学の下位分野は実に様々であり、分野によって、基礎的傾向が強い分野(人間の心と行動の基本原理の発見に重きを置く分野:例えば、認知心理学、生理心理学、

発達心理学など)と、応用的傾向が強い分野(現実場面で起こっている様々な問題の解決を目指す分野:例えば、教育心理学、産業・組織心理学、交通心理学、臨床心理学など)が混在している。いずれの分野でも、人間の心理と行動の原理についての基礎的理解や基礎的知見の蓄積が必須であり、それらを用いて現実的問題の解決が目指されていることは確かである。

- ⑩(出題意図)以下のような点を踏まえて、具体例を示しつつ論を展開できるかどうか評価することが目的である。ラットを対象とした実験において、今現在提示されている電撃から逃れるための反応が「逃避」、少し後に到来するであろう電撃から逃れるための反応が「回避」であり、そうした反応を学習することをそれぞれ「逃避学習」と「回避学習」という。